へ13
3689
15

門へ13
號3689
卷15

金華七愛化物十五編

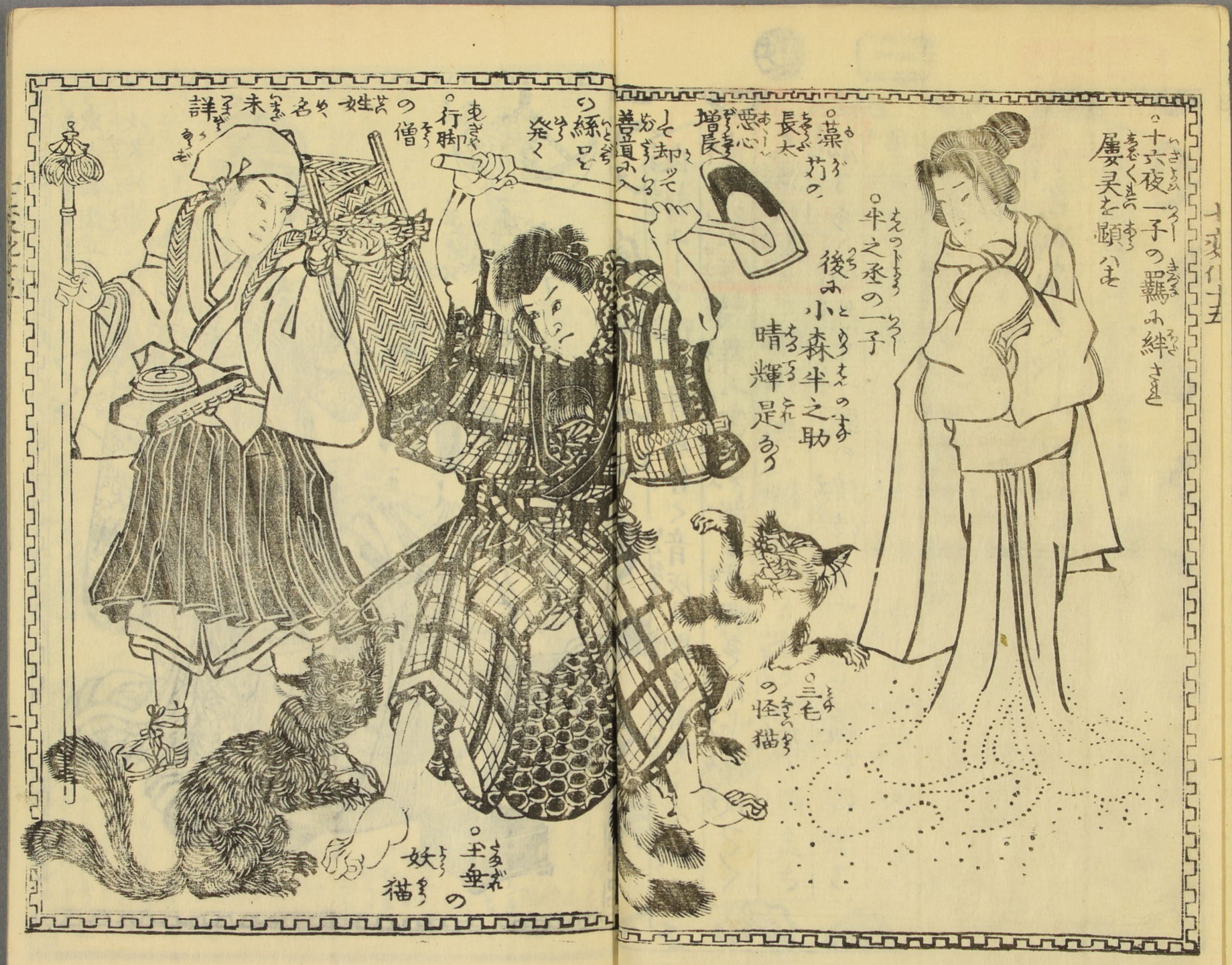
上巻

鶴亭主人作　玉松文庫

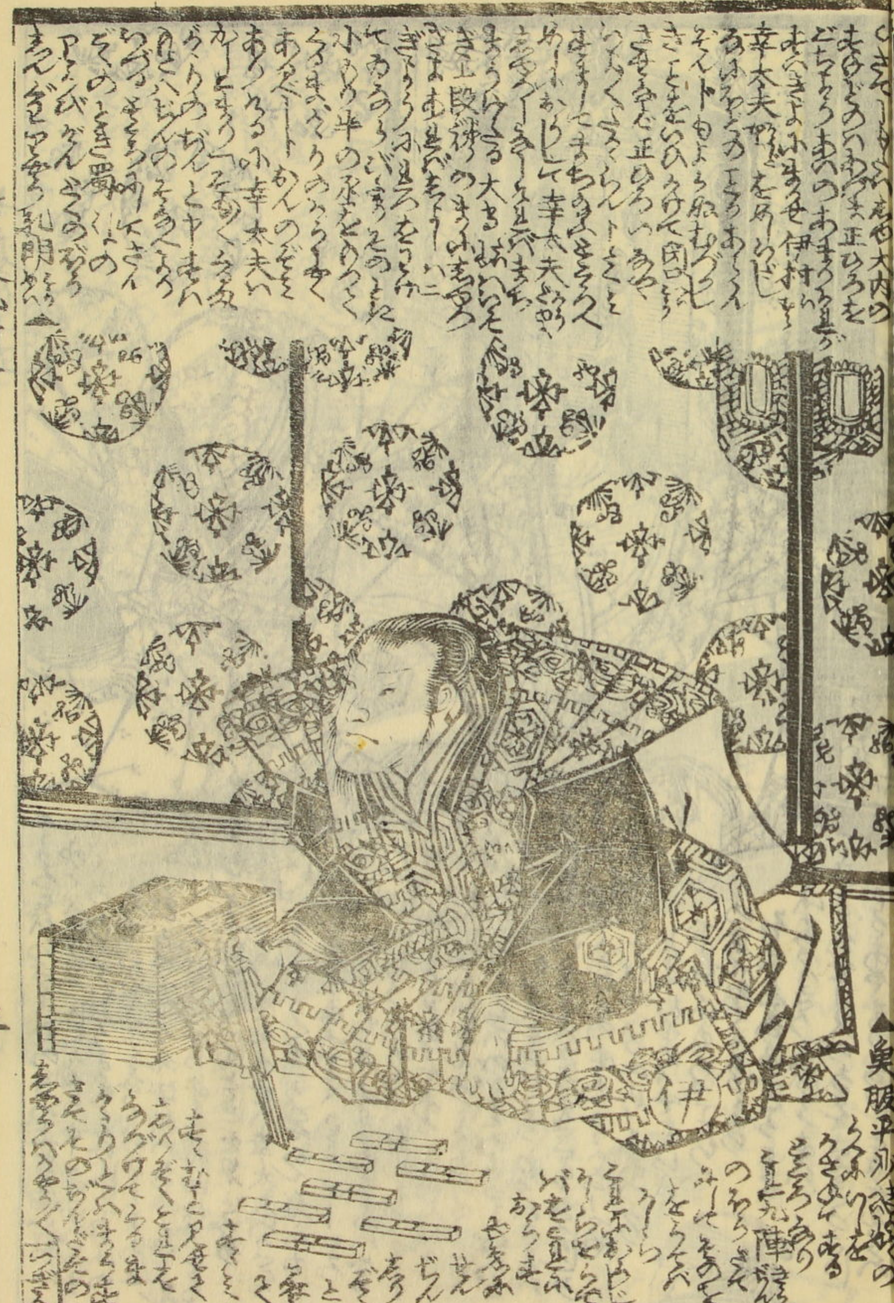
梅蝶主人画

夜静かに鴨が骨を折く音灰に聞え。風寒く〻獸の
炭を林火煙轉舞ふ雪の夕部も寸暇を。机上に頬杖つゞ
と。想ひ凝せど趣向と共に。稍消かゝる燈火の花と視る
筋もろ〻。雖然丁子頭の僥倖ありてや。次編を接穂乃
第出度も。今捻ハ早十有五の數を重ゝ。彼盃も數重ぶ
竟に顯る化の皮。其金華猫の怪談も。兎角に眼先の換
る戎專と。利ねぬ爪を研立て。無暗ホヒツカキ漸ふ。草稿畢りて
小半合の。酒に醉さへ尽しく。肱を曲る其中ふも。亦樂ふ有めぐし

文久三捻癸亥冬日稿咸同單子春発兒　鶴亭秀賀戯識

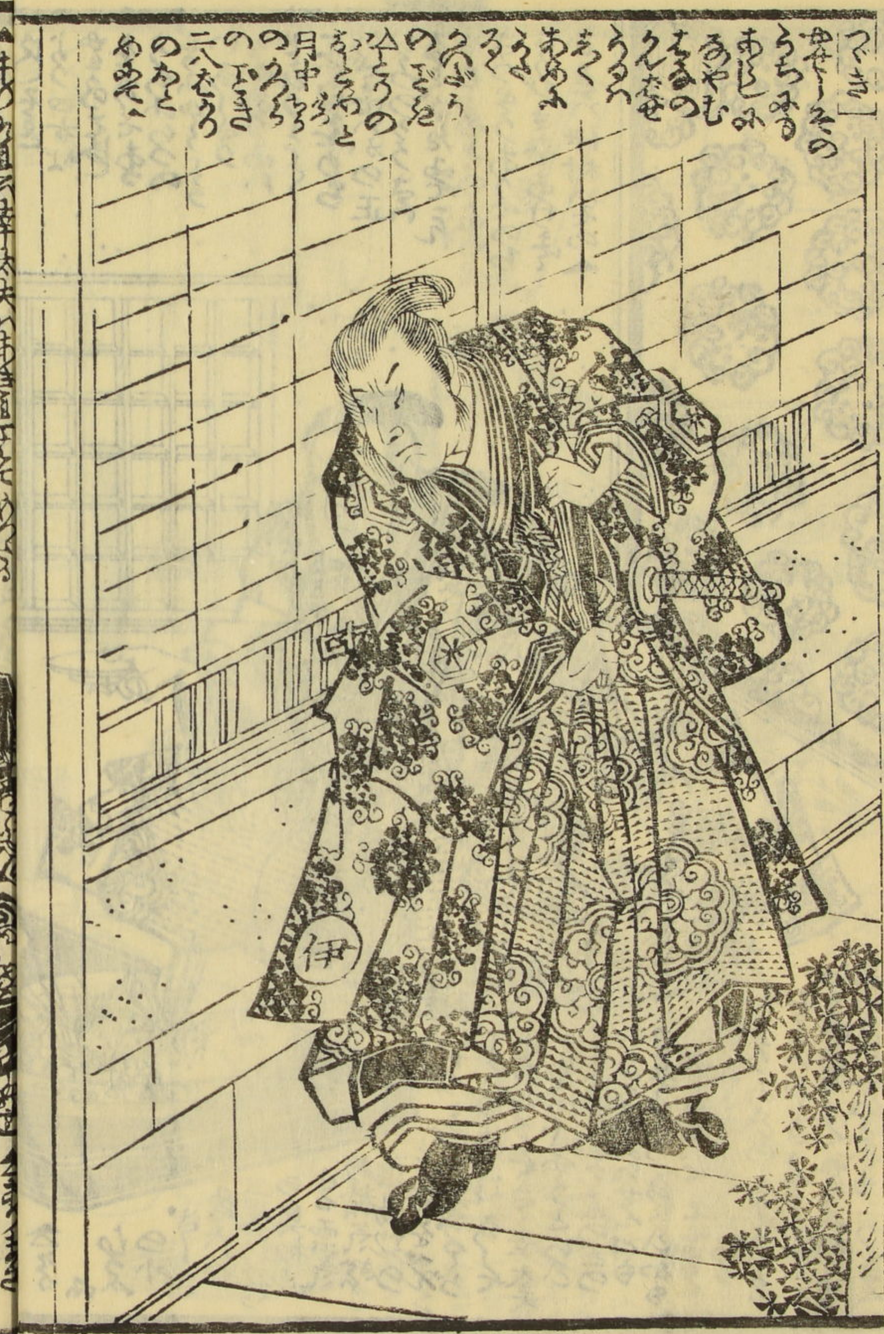

十六夜一子の羈み絆さま
屢昊を顕はす
藻苅の長太
悪心増長して却って善道に入る
行脚の僧
の絲口を発く
姓名未詳
半之丞の一子
後み小森半之助
晴輝是あり
三毛の怪猫
玉垂の妖猫

東喜兵衛正廣の次女於菊
伊村幸太夫光定の躰
幸之丞光忠

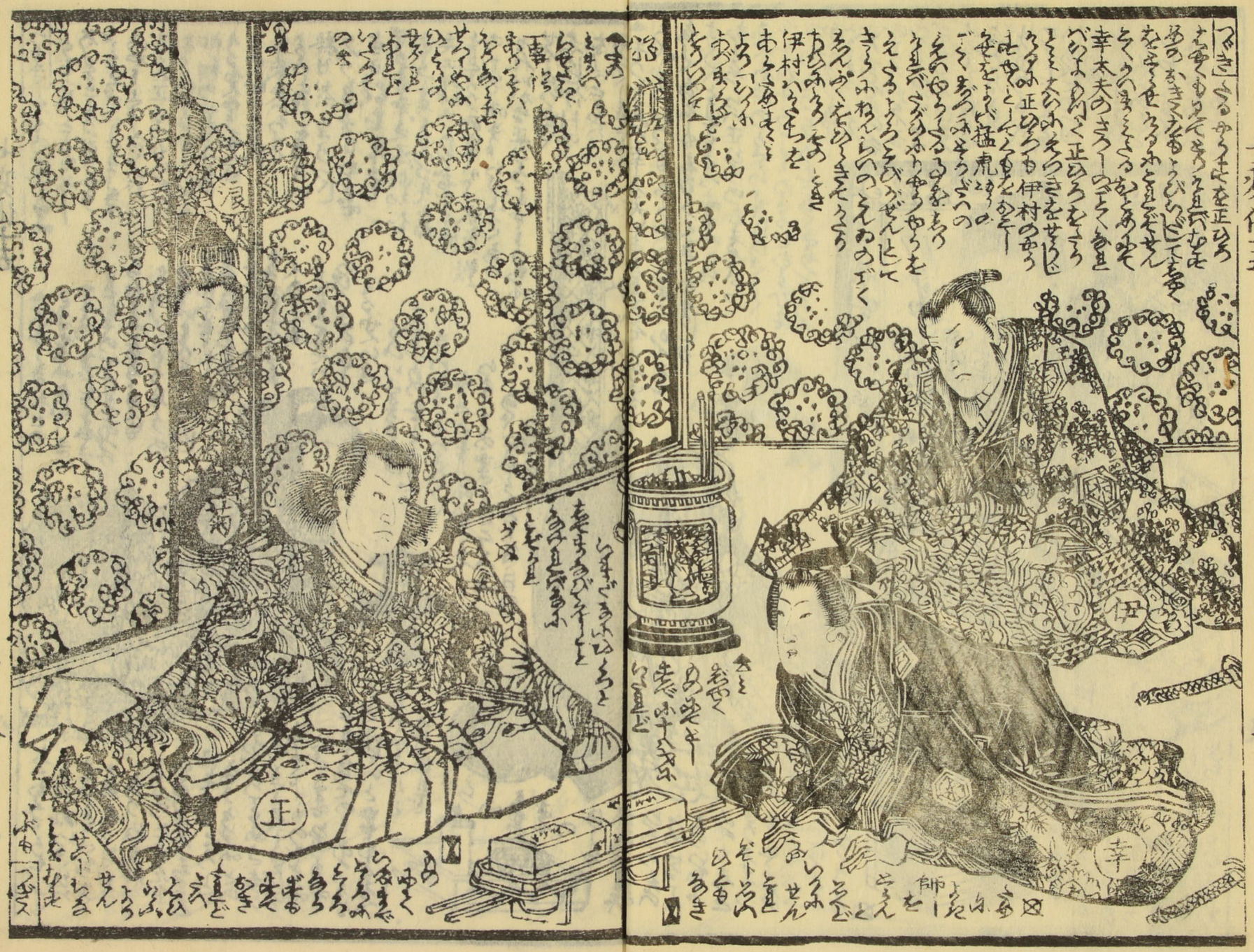


伊
豆

二
正
良
伊


伊

菊


伊
幸
正

七五編 綜文

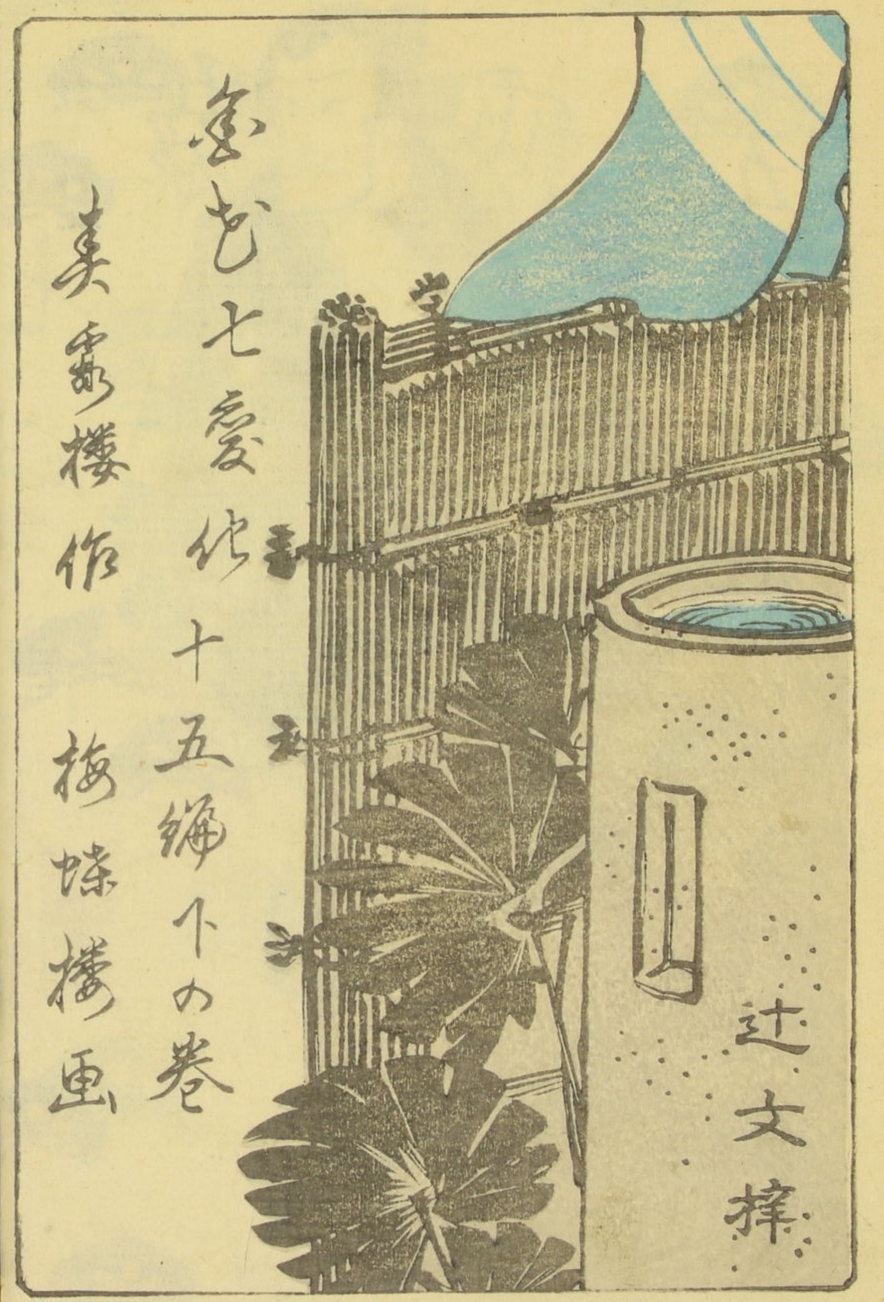
下巻

元治元子夏日
金松堂
辻文榛

秀賀作

國貞画

菊

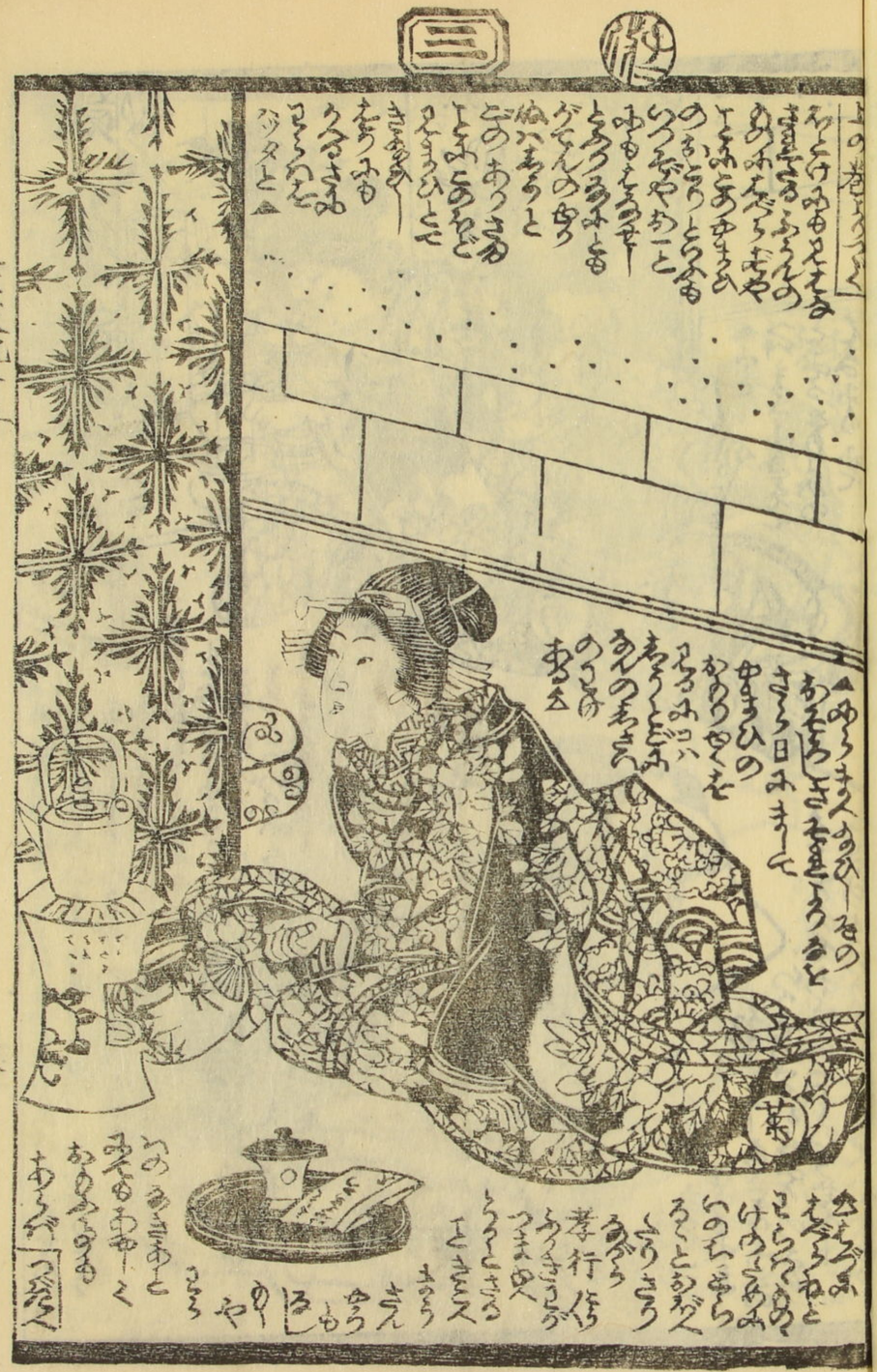


金七変化 十五編下の巻

美雪楼作

梅妹楼画

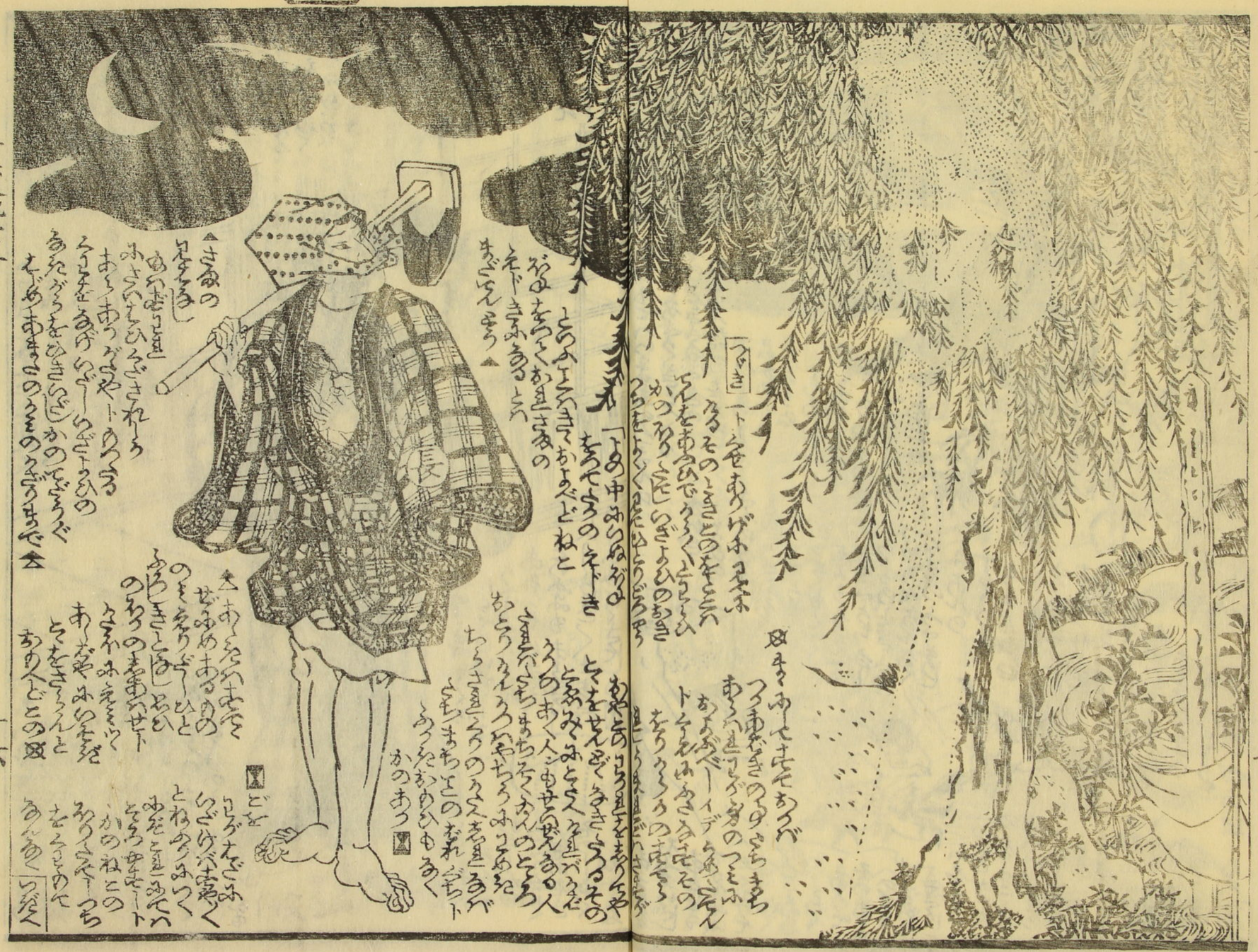
辻文様



菊
浪
正
半
つぎ
二日

浪
菊

長



つぎき　ろうめあの
うとのごとくゆ
おきろさたるづつの
まくをろあつめ
あきをのをよせ
そのらくふ
かのあうぞを
ねろさんと
まるゆまこ
るたらろる
そのとふの
いろふやーろん
みくをつろぬく
ごらくふあろく
なまたようき
あくらも
りごろん
まとふと
とろふ
かーい且
さまろの
あくゆんも
ろとく
とろごまた
けるぶまと
よりつとう

▲ごぞとあまたとあくん人
ろろみとまをきろひろふ
ざみふるあるふとの
ろどいふーおいせのろっ
つぎきあべるあさんも
ろりいしとのろいた太

▲いろぞせんトろふそろ
みあろちろきあづまの
らんふふろろあろんぶーろろ
のかくらるとのエ夜人
れとよりのぞむエとあろ
ねどよぎあくらんたろろ
ぎるふーるのあろん
ろくんのろちふろろく
のきけのあのあ夜ふ

長

ふト　ゆを
長太へ
きく
ろろ
ちち
まち
あく
ちんを
おこーかの
ろんんろく
をあたき
そのーあぐ
たぬせ

▲いろぞかくくの
りんでをのちどふ
うこーさりとん
あるぶちぬまと
とのふふもあろぎる
べーらまくとまど
ちちまろさんも

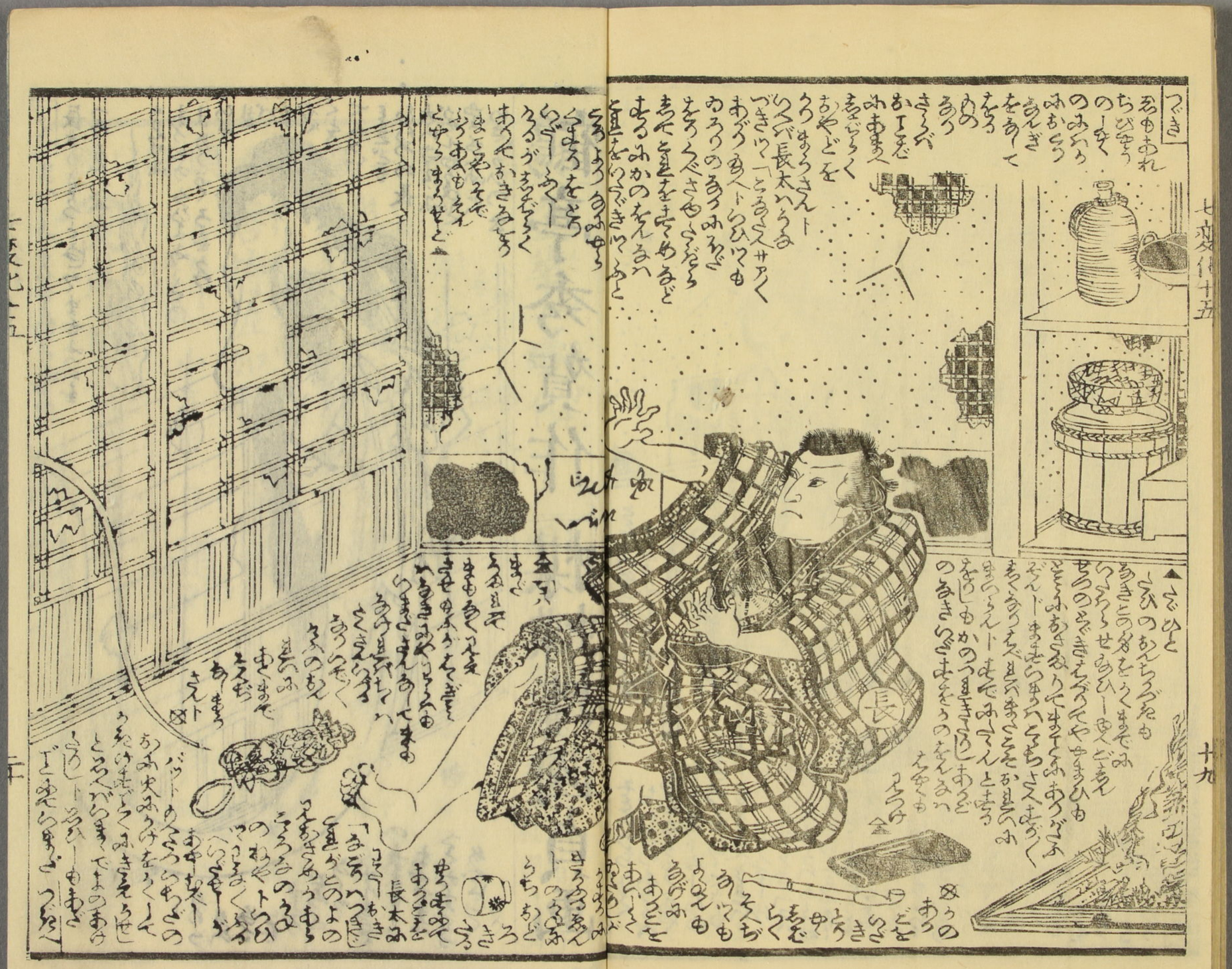
つまと
やき
て
人きき
ぞろろ
まをもろト
ふてびまと
ろろんあいま且
つねくくろく
ろんくトよぎ
きくそをーまろろふ
ろるそのたのりのをりろ
人とまづぬるふたかの月さ
九四郎のつまとせーりんぶ
ろりむの情人ろりしろる
の藻苅ゆがの長太ろり
長太いるのろろろろろのまの
ろるふいるろろのまの
ろりぞくりろぞやろり
このまぞりろくまろうをも
けきりふまのあまど
ろるきるもるくのろりんろ
ろまとあまをんろしるが
まとんるのをつぬの▲

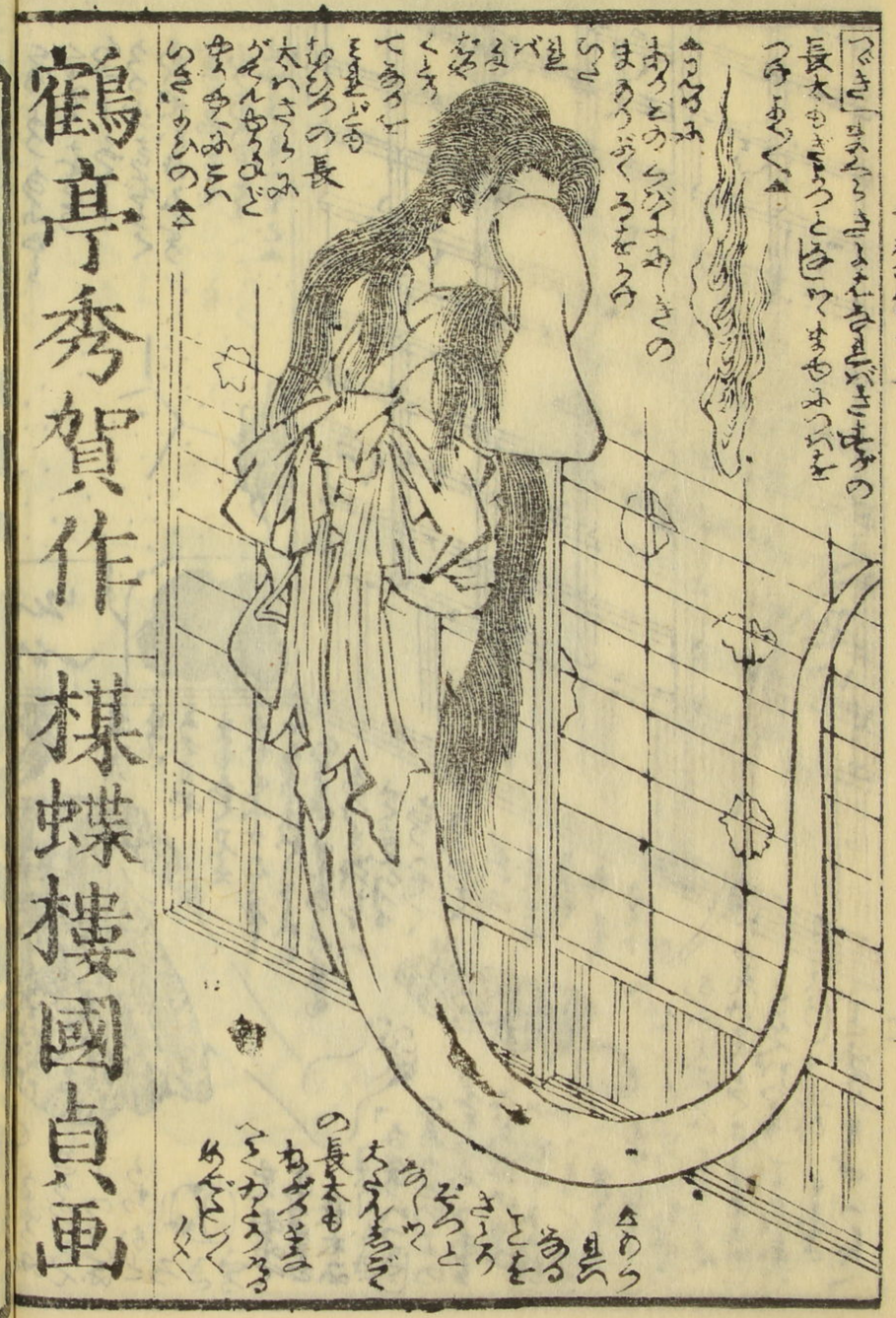
▲とのろ
かーふるあろあどとあ
きまるきろきるぞふ
長太いぬまと
ろくるろ
ぎのを
まつまと
ぞまと
ものの
ろど

▲いぞた
ぎるくゆつ
のんをまのふ
いぞころやを
きんぞんろん
とまるろちふも
ろまきまろあんろの
ろんをまをもん
ろまるふふ夜

つぎ

つゞき
長
次


つづき
長



鶴亭秀賀作

棋蝶樓國貞画

明治三庚午歳初春開版目録

金華七變化

廿八編 追々出板　魯文作　國貞画

右之儀ハ御存知之通り一世一代の新案新工風彫物ハ念を入古今の美術と倣なまじ者宮殿を好ぶ人

唐詩佐加那

初編より追々出板　山々亭有人作

周防染櫻模様

四編 五編　有人作　國貞画

梅春霞引始

三編　魯文作　讀切　國周画

濡衣女鳴神

十編　秀賀作　讀切　國貞画

假枕巽八景

二編　魯文作　讀切　國周画

道外江戸名所

大錦繪　五十番續　廣景画

文　地本雙紙問屋　金松堂　横山町三丁目　辻岡屋文助梓